

## 新島とシーリー(I)

——書簡にあらわれたる二十餘年の師弟關係と両者の性格——

オース・ケリー

Otis Cary

日本がその鎖國政策を放棄し、門戸を開放してから一世紀もたない内に、日本の歴史は無類の發展を示して來た。歴史的な見地から見れば、日本は封建制から、寡頭政治、立憲君主制、民族國家主義、軍部の獨裁へ到る一連の圓環を完成したという事が出來よう。今や日本は民主主義に向つて、以前にまさる近代的な道具をもつて再び努力しつつある。日本は今までアジアにおいて近代化され得た唯一の國であり、あの大戰の敗北を経てまでも國家の性格を維持することの出來た歴史における稀な例である。日本は過去においてアジアの全ての國の羨望の的であり、今日再びそうなのである。明治時代の近代化における最初の推進者達は、全ての歴史研究家に、——外國の學者にでさえ——又、いかなる分野の文化人にでさえよく知られている。即ち、岩倉、西郷、大久保、木戸、明治天皇、伊藤、山縣、板垣、澁澤等である。そして彼らは、政治、軍事、經濟の領域での功績により知られているのであり、尊敬されているのである。

しかしこれに比べて、文化の領域で活躍した人物の近代日本にあたえた影響又は効果をはかることはもつと困難である。いろいろな小説家、評論家、教育者達が頭に浮んで來るが、彼らの實際に果した役割を評價することは困難である。それで今になつて我々は、明治時代に偉大なる貢獻をなしたある人物らの評價を始めたばかりである。評價することの

最も困難な領域は、道徳と宗教の領域である。なんとすれば、それは根本的なものでありながら間接的であり、文化や社会にはたらく出して見える力になつて来るのに暇がかかるからである。内村鑑三、新渡戸稻造、新島襄、福澤諭吉、夏目漱石等に對する認識が近來新たにされて来たことにより、この領域はうすめられ始めた。これらの人物が何を近代日本に與えたかに關する再評價が完全になされるには、尙多くの歳月を要するであらう。しかし、こういう明治の比較的人數の限られた人物達が、いかにお互いを親密に知り合つていたかは驚くべき程である。そしてこれらの人物の間には、よりむき出しの親しさと、より深い關係があつた事が見出されているのである。内村と新島の關係は思つたよりも決定的なものであり、その關係がジュリアス・H・シーリー總長の聖者の様な手に、内村が新島の世話であすけられる際に頂點に達したことが最近發見されたのである。と同時に、兩者はアメリカにおいて新渡戸とも文通のみならず會見をも通してお互に交渉をもつていたのである。

こういう事は、しばしば隠れた事實として長い年月の間無視されていたり、あるいは、知られないままになつていくことがよくある。そしてこういうことは、日記や古い書簡や書簡の草稿の中から見出される場合が多い。しかもこういう書簡は、日本語以外の言葉でよく書かれていたのである。たとえば最近發見された一八八五年夏の内村・新島間のいくつかの書簡は、この一つの例である。この書簡は二人の間で殆んど英語で書かれ、ここで内村は、年上のキリストに在る兄弟にして同藩人たる新島に自分の精神的苦惱を打明けるのである。新島は、内村がアーモスト大學に行き、新島の舊師ジュリアス・H・シーリーの世話をうけることが、内村にとつて唯一の解決策であると確信していた。そこで新島は、三カ月以上にもわたる文通で、その目標に向かつて内村を導いたのである。

それ故、新島自身と、彼が最も尊敬し且愛した教師であるシーリーとの文通をここに始めて發表することが出来るのは、幸運なことであるし、又興味深いことでもある。これらの文通には、新島の學生時代のものから、彼が死ぬ僅か二

三カ月前の最後の書簡まで含まれており、この最後の書簡で、新島の母校アーモスト大學が、日本のアーモストである同志社の創設者であり、アーモストの異例の息子である彼に、最高の名譽を與えるという知らせに對し、新島は自分がそれに値しないが、受けるということを、謙虚に告げているのである。

これらの新島の書簡は、新島の母校アーモスト大學に保存されているものであり、アーモストの十二代の總長であり、在任中に同志社を訪問した唯一の總長であるチャールス・W・コール博士によつて、その寫眞版が一九五三年に同志社にもたらされたのである。この書簡の寫眞版は、美しい皮で製本され、彼の訪問の記念として同志社に残された。

表紙には“*Letters of Joseph Hardy Neesima to President and Mrs. Julius Hawley Seelye 1868—1889*”と印刷されており、とびらの頁にはコール總長の手で“*Presented to Doshisha University by Charles W. Cole for Amherst College February 11, 1953 in grateful memory of Joseph Hardy Neesima who is revered by both institutions.*”と記されている。それがここに始めて發表されるのである。これらの書簡と對應するシーリー總長の新島の書簡は以前から同志社に保存されており、未發表である——一通を除いて——ので、その全てをも新島の日記の一部と一緒に、右の書簡に合せて發表するのである。

X

X

新島はアーモスト大學における彼の最初の夏休みを利用してニュー・イングランドの徒歩旅行を試みた。彼は五週間かけて四百マイル以上も歩いた。Worcester を出發し、Boston, Andover, Lawrence をへて、目的地である New Hampshire の White Mountains まで行った。この手紙は Winnepesaukee 湖を渡ぶとき、よく揺れる船の上でシー

リー教授に宛てて書かれたものである。こうした徒歩旅行は當時の學生たちの間でよく行われた。新島は彼の自然科学の先生であつた Edward Tuckerman 教授に刺戟されてこの旅行に出掛けたのであろう。この人は White Mountains にしよつちゆう行つていた人であり、また有名な Tuckerman Ravine は発見者である彼にちなんでそのように名付けられたものである。さて、この旅行で新島は幾人かの友人と一緒にであつたにちがいない。新島は道すがら鑛物の標本を採集して行つた。そして途中 Lisbon の金鑛と Warren の銅鑛とを見學したくなつて、一行から別れた。Hanover を經ての歸途彼は Dartmouth College の鑛物學の教授を訪ね、醫學部の講義にも出席したりした。新島は八月二十一日にアーモストに歸つてきた。ところでシーリー教授の方はこの日までに「西部」からアーモストに歸つてきており、新島は寄宿舎の自分の部屋に入るまでの數日間をシーリー家ですごしたのである。

新島のクラスメートのうち何人がこの「強行軍」に参加していたか、また Everett Thompson がその中にいたかどうかも明らかでない。新島の日記によると、およそ二十年のちに、前とそつくり同じように Thompson 家のところで一夜をすごしたことは明らかである。一八八五年七月七日、八日にかけて新島が二度目に立寄つたとき、その前年まで高校の教師をしていた Everett は未婚のまま、父と一緒に North Woburn に住んでいた。

この手紙はアーモスト書簡集の中では新島からシーリーあての最初の手紙である。明晰かつすぐれた筆蹟で書かれている。綴りのあやまりもそのままであるが、新島が聞きとつたニューイングランド辯を聞きとつた發音のまま出しているところにも興味がある。

Wolffboro, July 28th/68.

Mr. Seelye,

Dear Sir,

新島とシーリー

I am very well through the grace of God. Since I left Amherst, I have stoped in several places & spent a day or two with my friends generally. Therefore I have not advanced so far as we would think. I came through Boston & Andover, and I am now on the lake Winnepesaukee. We took steamboat from Alton bay yesterday, came to Wolfborough, stoped in Rev. Mr. Thompson's house last night; —He is father of Mr. Everet Thompson. Please excuse my using pencil. I cannot use pen very well, because the boat shakes my hand so much.

I am very sorry, that we have very smoky weather. We can't see very clearly distant senary.

Some person told us. there was a great fire in Canada & caused such a fog. We have been Weirs just now & going to Center of Harbor.

I arrived at Center of Harbor at  $\frac{1}{4}$  to 1 o'clock P.M. Mr. Thompson came over with us to Center of Harbor & carried dinner for us. There is very large Hotel; —Great many companies took dinner there, & got couch for White Hills.

We have been travelling about 2 miles from Center of Harbor, & now resting on the foot of Red hill. If the weather be clear, we should like to climb up the hill very much.

We ought come through the Maine road, but we thought, it would be best way to take straight course from Andover. We came through Lawrence Methuen, Salum, NH. Derry, Chester Raymond, Deerfield, Barnsted to Alton bay. It seemed us very short way, but we found it very Zig Zag.

Some gentleman told us, it would be much shorter way come through Dover.

We have had very pleasant excursion so far. We have been camping out once. -----and slept in barn 3 times. ③

We have been travelling very much but only 7 or 8 days; -----We have spent rest days with our friends on the way. We shall not have any more friends toward the mountain; -----so we must be entirely strangers.

I suppose, you will going out the West pretty soon. I should like to hear from you, but I could not tell you, where your letter may be directed, because our excursion depend on circumstances. Probably we may change our directions. Did you hear from Mrs. James. She had much time when she got in car at Palmer, so she hasted very much; -----I was so afraid, that it would hurt her. If you write to her, please remember me to her. Please remember me to Mrs. Seelye, Willie, Bessie, and all who I know. I hope, you will very pleasant vacation indeed. 41

Your grateful friend

①  
Joseph Nee Sima.

We mete quite hard rain last Friday evening near to Salum. ①

② It rained whole night. -----Since that time we have very pleasant cool travelling. I misspelled Wolfborro instead of Wolfborough.

④ Everett Augustine Thompson (1847-1890) はローモースト大學1871年の卒業生で、1874年にローモーストから M. A. を得た。彼は  
マサチューセッツ州の Springfield や Woburn の高等學校で教えた。彼の父 Rev. Leander Thompson は1835年のローモースト卒

業生、また1838年のアソドヴァーグー神學校の卒業生で、1839年にアーモストから M. A. を得た。彼は1840年から1843年までアメリカン・ボーアの宣教師としてソリアに滞在した。

㉔ この手紙はここでペン書になつてゐる。

㉕ coach のあやまり。つまり駅馬車のこと。

㉖ Salem のあやまり。

㉗ Barstead のあやまり。

㉘ 彼等がとつた道はアソドヴァーグーから Winnepesaukee 湖に至る最も近い道ではなかつたが、Dover を経て行くことの方が一層近かつたとは言えまい。

㉙ この頃ニュー・イソングラソドでは知らぬ旅人を軒屋の乾し草の中に寝かせるようなならわしもあつた。

㉚ 新島はここで not を落したのである。

㉛ これらの手紙に見られる通り、「新島」という名前のローマ字化の進化は興味深い。この手紙では彼は二つの漢字を別々にローマ字化している。1870年までには、彼は Nee-Sima という風に、間にハイフンを置き、二つの大文字を用いている。1875年までには彼は Neesima と一つの名前で書くようになってきた。この頃新島はどういう辭書を手に入れていたかわからないが、J. C. Hepburn の辭書は1867年に上海の American Presbyterian Press から出ている。しかし新島は自分の姓をローマ字化するにあつて自分の最初の試みを發音にもとづいて固執することをおんだと見える。彼が jima よりは一層柔かい、shima の方を好んだかどうかは明らかでない。なぜなら彼の綴りは各漢字の一つ一つの發音から進化してきているように思われる。Nee の次に -sima もしくは -shima が来ることは上州なまりに一層近いかもしれない。もし彼が一息で日本語に入れたなら、當然 Hepburn にしたがつて一層合理的に Niijima もしくは少くとも Neejima と書いたことであろう。

㉜ 註㉔に同じ

㉝ 現在では Wolfeboro と綴る。

X

X

新島がハーディー一家とクリスマスを共に過したことはシーリー夫人に宛てたこの青年らしき感觸の手紙によつて

つきりしてゐる。また、夏はくばつて彼は大に睡眠をとり、眼を保養して健康を増進させ、學究心を養つたこともわ  
かぶ。彼が好むはシーリーと論議したがつてゐる「精神科學」と言う言葉は、「心理學」の先驅者でありシーリーの叔  
父であつたロケット博士の言葉なのである。

Andover Dec. 27th/70

Mrs Seelye,

My Dear Madam

I received Professor's letter yesterday morning, and yours this morning on my return from Boston. When I acknowledged of your sending me a watch as a Christmas present by the express through reading his letter, I exclaimed "Oh! What happy man I am" and I went round my room several times, leaping & jumping with a great joy. Though I am trying to put aside all boyish and heathenish manner, yet it comes back to me especially in such a joyous occasion. So you can judge how much I felt happy and thankful for your choicest and most thoughtful Xmass present. I do not know indeed how I should express my gratitude to you. Yeas indeed my tongue or my pen utterly fail. But let me simply say "Please accept my repeated & heartfelt thanks for your choicest gift & kindest remembrance of me with the return of these Xmass festivities. I have not received your express yet. I hope it will reach me safely."

I have been thinking of you much recently & desiring to write to you, for it was a long while since I wrote you & received your kind reply & also Bessies very nice letter.

I am sorry for my keeping it unanswered so long. Please tell her that I will answer it in some other

time. I think it was very well written.

It was her first letter ever written to me. I esteem it very highly. She mentioned of Dr. Hitchcocks being ill. I hope, he is better at this time. If you see him, please him my kind regard. ⑩

I was invited to Mrs. Hardy yesterday, & spend last evening with her. I found there all all her sons & their wives, except Mr. Arther's wife. Mr. & Mrs Hardy seemed well pleased with the family gathering. I came back here this morning. I find myself rather busy with my study. ⑪

I will write to you or Professor again, when I receive your present on my hand. ⑫

I am very glad that you are all well. I think of you & your children very much & desire to see you & them especially on Sabbath evening, & hear you & them sing. I long to see Professor & talk over with him about Mental science. ⑬

If the Lord will, I will expect to see you all next summer.

Please excuse my hasty writing.

Please give my kind regard to Professor & kiss all your children for me. Bleive me I am your grateful friend

Joseph Nee-Sima. ⑭

Please remember me also to your mother & Prof. & Mrs. L. C. Seelye. I must not forget to inform you that my eyes are growing better & my health is also good. ⑮

- ④ 輸送業者
- ⑤ *yea* と *yes* とを重ねて *yeas* になつたらしい。
- ⑥ 註①と同じ
- ⑦ “Old Doc Hitchcock” (1828-1911) はアーモストの1849年の卒業生であつて、1852年にアーモストから M. A. を、ハーヴァードから M. D. を得た。半世紀にわたつて衛生體育學の教授であつた。彼の指導によつてアーモストは體育學科を持つはじめての高等教育機關となつた。彼は人體測定學の權威であつた。
- ⑧ 新島はここで *give* を落したのであろう。
- ⑨ *in* のこと
- ⑩ 上の July 28, 1868 の手紙の①参照。
- ⑪ The Rev. Laurens Clark Seelye (1837-1924) は、近隣の Northampton の Smith College の初代總長になる前、1865年から1873年までアーモストで修辭學の教授であつた。

X

X

これは新島が日本に歸つてからシーリーに宛てて書いたはじめての手紙である。シーリーは一八七二年の夏に Edward Hitchcock 博士とともに世界旅行を試み、インドで暫くの時を費し、日本にも一寸寄つた。ここで言われている *double duty* はその頃のシーリーの政界での働きと關係があるにちがいない。彼は西マサチューゼツツで廣く尊敬されてゐたので、マサチューゼツツ州知事から州の税制を改訂するための三人委員の一人を依頼されてゐた。彼は一八七五年の一月に提出された報告文書の殆どの部分を書いたのである。また一八七四年秋には彼は第四十四回國會に出馬するよう要請され、奇妙にもこの無所属候補は共和黨の地盤で、共和黨の候補者を向うにまわして闘い、當選してしまつた。シーリーはこの間にも教え続けていたことにはまちがひなく、彼が觸れているのはこれらの學校外の仕事の片方、もし

くは兩方であつたにやがらなう。

新島はこの手紙の中へ missionaries と對比して、教えることを許せぬといふに Reverened men のことを觸れつゝる。このことは新島がやがて多くの時間と努力を費して、中央政府の當局と絶えず折衝しなくてはならなかつた問題を興味深く物語るものである。

Osaka April, 27th 1875.

Prof. Seelye

My Dear Sir :

Yours of Feb. 17th and of March 10th with Mrs. Seelye's kind letter were duly received. I am glad indeed to hear from you & to learn that you are very well, notwithstanding your double duty which you mentioned of in your letter. Willie is proved to be a good scholar, Bessie is studious Anna is paying attention to drawing & little May is gay & happy. While I am thinking of yourself & your family I could almost see before me what is going on in your family. I wish I could be with your family once more especially in the season of your family devotion.

I ought to have written your before this time but since the first part of last February, I have been troubled by rheumatism and especially by nervous headach and sleeplessness. I was obliged to leave off my work and take a trip to surrounding countries here for three weeks. I returned here last Saturday 24th Ins. & resumed my labor. Although I enjoyed the trip, still I found it a hard work to stay away from Osaka.

Perhaps you may be interested to know something of my trip.

I went to Nara which lies 16 miles east from here, & where exhibition is first time opened this year. Nara is an ancient town & was once a capital of the Empire. There are great many interesting things connected with her. Although I saw many old valuable things for inst bronz vases, etc., what interested me the most was that huge bronz Daibutsu. The following dementions of him will assure you that this Daibutsu is larger than what you saw at Kamakura.

The height of the whole body Shiaku 53.5  
one shiaku is nearly your one foot.

Length of face	16.
Widdth of face	9.5
Length of eye	3.9
W. of mouth <sup>④</sup>	3.7
W. of nustril <sup>⑤</sup>	1.

Thence I went to Uji where our best tea is raised. From Uji I went over to Lake Biwa which scenery can be quite equal to that of lac lamon in Switzerland.

Thence I came to Kioto to see the annual exhibition there.

I stayed in Kioto three weeks & occupied myself busy for sight seeing, & also tried to introduce Christianity to that place. I trust the Lord will open that place for his Gospel before a long while.

I was persuaded by one of the prominent men in that place to bring my future college there instead of having it in Osaka. I may do so if we could get permission to teach Christianity openly. Our plan for a training school is not quite matured yet. I tried to get it started on a high elevation in this city, which is almost an outskirts of the city & of course, is outside of the foreign concession. Seven thousand dollars were already given to us for that purpose by a native merchant in this city.

To my great disappointment, the Governor in this city would not allow me to get missionaries to teach in that school. Therefore I wrote to Mr. Tanaka & asked him whether we could have missionaries to teach Xty & some other science in our school. The reply was that Reverened men are allowed to teach but missionaries are not.

The teaching Xty is not strictly forbidden but the hiring so called real missionaries in our school is not allowed yet. On the other hand, our missionaries would not become mere school masters.

Having found difficulty on every side, I was obliged to postpone the College business for a while.

When Mr. Davis starts a training school in Kobe, I will take a part in teaching there.

That merchant who gave us \$7,000 will keep it & get it interested for our future use. <sup>②</sup>

So you see how the Lord does work among the people, who are still ignorant of his truth. Our work is much encouraged here.

Attendents on our Sabbath service are increasing, & getting more permanent than ever before. Please pray for us without ceasing. I am glad to know that you were satisfied with what I bought for you. I

will try to get what you mentioned of, in a convenient time. I will not write to Miss Page at this time, although I am intending to give her a reply for her letter in some future day. Please give much thanks to Mrs. Seelye for her kind letter. I will include my reply to her in this note in order to save my time & strength. I have great many things to inform you about our missionary work still it does take too much time to do so now. So I will save them for some other time.

I am working here as an acting pastor and am learning how to work by working and experimenting in many ways.

I find myself quite busy for keeping some church members straight as much as my preaching or teaching. Pray for me that I may grow in his grace more & more & be a humble instrumentarity in His hand, to spread His Gospel in my dear country. Please remember me kindly to Mrs. Seelye & your children.

Your Grateful friend :

Joseph H. Neesima

Remember me also to your uncle Dr. & Mrs. Hicock & Pres. C. Seelye's family. Tell Kanda that I handed his note to his father when I reached Kobe first time. Give him also my regard. I do not know yet what became of Hiko.

⑦ width のこと

⑧ 註①に同じ

③ Lac Léman 或は Lake Geneva——レマン湖

① 同志社を設立した三人の一人となつた山本覺馬氏のことであらう。

⑤ ここに商人とあるのは大阪の富豪磯野小右衛門氏のことであるらしい。かねてから新島の知己であつた木戸孝允は新島の志を助け、1875年2月に、この磯野を説いて、公園設置のために出した寄附金の「二萬金」を、學校設置資金に振り替える決心をさせた。この7,000ドルはこの「二萬金」のことらしい。ここで利子をも積立ててもらえらるとソーリーに傳えているが、どうした故障によるのか、この金は同志社には入らなかつた。

④ instrumentality のこと

① 名譽神學博士 The Reverend Laurens P. Hickok はソーリーの伯父にあたり、相當知られた哲學者であつた。彼の作つた教科書はウイリアム・ジェイムズの本が現れるまで、アメリカで廣く用いられた。彼は Auburn 神學校の教授であつたが(この神學校にソーリーはアームストを卒業後入つた)、のちにニュー・ヨーク州 Schenectady のユニオン大學の總長代理になつた。彼はのちアームストに隱退し、ソーリーの家の隣に住んでいた。

① アームスト大學1879年卒業生である神田乃武(1857—1923)は大學入學前の高校時代をアームストの町ですごした。もちろん、この人は後の神田男爵で、古典文學と英文學の有名な教授となり、近代日本の「英語教育の父」になつた。彼はアームスト大學創立百年記念祭にアームスト大學から名譽學位を与えられた。

① これは恐らくあの有名な漂流者 Joseph Heco (1837-1891?) のことであらう。彼は歸化してアメリカの市民となり、1862年10月から1863年九月までの短期間神奈川における米國領事の通譯官であつた。當時彼は時々逆に日本人に雇われたりしながら、私的・公的ないろんな地位にありついたりしていた。英文で書かれた彼の日記によると、この頃ちようど Heco は “left Kanagawa [after disposing of my office and my house in Kanagawa] for Kōbe to take up my engagement with Mr. Kita in Hiogo.” Kita 氏には Heco は “to reorganize [his] business, inasmuch as he found that the changing times made such a measure necessary.” とたのまれ、そして Heco は “under certain conditions……agreed to do so……” pp. 191 and 196. *The Narrative of a Japanese; What he has seen and the people he has met in the course of the last forty years*; ed. by James Murdock; Vol. II, 1895; Maruzen, Tokyo. ソーリーは恐らく、新島といふふん似た経験をしたこの有名な漂流者を知つていたのであらう。そして、Heco は日本に歸りついでいろいろしているかを新島について聞いたにちがいない。

シーリー夫人に宛てられたこの手紙は、シーリーが William A. Stearns 博士の後を襲つてアーモスト大學の總長に指名されていらはじめてのものであると想像される。新島の家族がキリスト教を受け容れるにあつて直面することになつた困難について新島がここで述べていることは注目に値する。特に新島自身は、可能な方法として自己自身の *sinful and benighted* を完全に認めることがあるだけであることを見出している。キリスト教に改宗させるための最上の方法に關するより最近の議論の觀點からしても、近代日本で、家庭としてキリスト教をいちはやく受け入れた場合の例として、新島がここで彼自身の家族に關してまさしく正統の行き方を取ろうとしたことが注目されなくてはならない。

新島は一般に同志社の設立者として知られているわけであるが、實は山本、デーヴィス、新島の三人がいなければ同志社は當然存在しなかつたのである。しかし、更にそれ以上に忘れられていることは、新島が、京都と同志社および彼の郷里である安中を通してのみならず、國中のあちこちで、さかんに日本に傳道するという仕事をはたしてきたことである。彼の死の床での最後の献身的な努力は、自分の前に五枚の大地圖を擴げさせ、どうして日本に傳道するかという作戰計畫に向けられていた。そしてこのことが彼の人間としての尺度を最も明らかに示しているのではないかと思う。この手紙の中には、京都で新島の仕事が始まり、京都の初期の三教會が形成された頃に、人間としての彼は何によつて導かれていたかがはつきりと示されている。

Mrs. Seelye

Dear Madam :

Kiyoto Japan

Dec 24th/76.

新島とシーリー

I beg your pardon for my keeping a long silence to you. Since we have opened this new station, I have found myself very busy for teaching, preaching & attending all sort of business connected with our school. Hence I was obliged to suspend my letter writing to my friends almost entirely during the term time. The fall term closed yesterday. I feel somewhat rested this morning and feel like writing to you this note in order to inform you about our station work as well as my home affairs. I am thankful to say that through the kind Providence we have met a wonderful success entirely beyond our expectation. A year ago we began to open our school with a dozen students in a hired house. Now we have 70 students in our own buildings & more over two third of them are Christians, and most of them have already begun to work for their Master. A year ago we had only two preaching places with very few audience. We have now four large preaching places & fifty five places with rather small audience varying from 30 to 10. A year ago we had only ten believers with us, but now we have more than sixty.

We divided them into three parts & formed three different churches:——so each church has about 20 members.

We have not yet special buildings for the service but our churches are formed in our houses.

Our first church <sup>①</sup> was organized in Prof Learned's house on the 26th ult., 2d church in my house on the 3d Ins. & 3d one in Rev. E. T. Doane's house <sup>②</sup> on the 10th Ins.

Our students are very eager to work & each one of them is trying to find one or two preaching places for themselves. Here is some danger of their not thoroughly preparing themselves for the work

still through their effort the truth is spreading like fire on autumnal fields. The spirit of God helps it as I believe & none can stop it. More than a dozen students are going to be colporteurs during this brief vacation.

Their chief aim is to preach wherever they go. Some of them have gone out this morning. They go out two by two. I trust the Lord will go with them and give them a great success either in selling books (the Bible & tract books) or in preaching. I do not remember whether I have informed you about my parents coming to Kiyoto & living with us in my last note or not.

They were hoping to come to Kiyoto almost a year ago, but being prevented by cold weather they could not come to us sooner than last spring. They are living in a part of my hired house & are very happy by their being so near to us.

My parents are rather slow to understand the truth. Of course they have already forsaken their old gods, but one difficulty of their embracing the new truth is their not enabling to see their own sinful state. I have been trying to help them to see their own sinful state thus far. I believe my father has begun to see it & feel very sorry for his past sins & has recently pray to God for the forgiveness of his sins. I am sorry to say that my mother does not feel she has committed any sin. I trust the Sun of Righteousness will shine upon her sinful heart & help her to see her own sinful & benighted condition. The mother & niece of my wife & one of my sisters were received into our church by the new confession. I suppose you have been long waiting the tortoise shell wares. We could find those wares no where

else but in Nagasaki. So I have been hoping to go to Nagasaki myself during some vacation, but having failed to go there myself I asked one of my missionary friends to buy them for me. He has kindly complied with my request & has recently send them to me. As you know I received \$25 from Professor. \$25 = 22.70 mix. dollars = 23.45 Jap. ens. I spent 10.24 for what I have already sent to you. Subtracting 10.24 ens from 23.45 ens leaves 13.21 ens. 13.21 ens were not quite sufficient to buy two breasprins, two sets of breaslets, & one gentleman's watch chain. Hence I made a trifle addition to it which I hope you will accept as a token of my respect to your children. Beside those wares my wife puts in one set of breaslet, which was made here by our order. It is not so good as Nagasaki work. Still she desires to send it to you. I hope you will kindly accept it also.

I am sorry that I can not send them some time before this. I packed them in a small box. I hope they will reach to you in safety.

Please remember me to your children. I shall glad to hear from you

Yours sincerely

J. H. Neesima

- ① これは京都第一公會のことで、11月26日に組織され、後に第一と第二が合同されて同志社教會として現在に至る。
- ② これは京都第二公會のことで、12月3日に組織された。
- ③ これは京都第三公會のことで、12月10日に組織され、現在に至るまで平安教會として續いている。
- ④ The Reverend Edward T. Doane (1820-1890) はニューヨーク出身のアメリカン・ボード宣教師で1875年から1877年までの2年間、京都に滞在した。彼はイリノイ大學とユニオン神學校の卒業生であつた。

⑤ There of 2

X

新島は our humble institution について、それが「わが母校アーモスト大學が貴國においてそうである如く、同志社が日本のキリスト教文明の中心となる」ことを希望し、かつ祈つてゐる。新島が、自分のモデルは、また自分が同志社を通してしようと試みてきたことは、日本におけるアーモストを築くことである、ということを表示したのはこの手紙がはじめてであらう。

X

この手紙はまた新島が海の貝殻を採集したこと、ならびに海の底を視察したこと、またアーモストで確かに刺戟されたやり方で、彼の學舎で用いるべき標本を買おうとしていたことを示してゐる。彼が「民衆に眞理を説くとき、非常に靜かに語る」ことは、彼が米國、日本のどちらにしよう、とにかくどこにしよう、疑惑の眼で見られていようと、昔のパウロの如く、キリストの證人であることを示す機會を彼が決して失わなかつたことを示してゐる。

55

Wakanoura, Japan

July 18th/77.

President & Mrs. Seelye

Dear friends

Yours of the 20th of the last March was duly received. I was very glad to hear from both of you. I was much interested in the news all about yourselves & also about Amherst. I might have written you before this time but have been prevented to do so on account of many duties coming upon me every day. Our spring term closed on the 18th ult. but I could not get away from Kiyoto for my vacation

新島とシーリー

55

until the 6th Ins. I left Kyoto with my wife & came to Osaka within two hours for we could travel by the rail way between two cities. We stopped in Osaka over one night. Thence we started for this place on a Jinrikisha, a cart drawn by man. We stopped on the way in a city named Wakayama for three days. It is a the chieftown of this district. There is a large castle, which was once possessed by a prince but now occupied by the government's garrison troop. There are about 60,000 inhabitants. While I was there I spoke of the truth to the people, who were stopping in the Hotel in a very quiet manner but as Christianity was never preached there it is much hated & regarded by the people as the devils religion. By some way rather the rumor of my being there spreaded out very soon. Just after we left the Hotel a police came there & inquired the Hotel-keeper who we were, for what purpos we came there, what we had done there etc. We came to this quiet fishing village a week ago last Monday.

As we knew no one, we had some difficulty to find our lodging but a wealthy fisher man invited us to stay in his villa which is unoccupied presently. We came here with the purpos of taking the sea bath, which I find much beneficial to my system. We are comfortably situated here. Fish is plenty & vegetables also. Above all we enjoy the sea breeze & quietness.

⑨ I dip myself to the sea every day & take some moderate exercise on mountains & hills which are within a short distance. I am gathering the sea shells for my amusement & am quite surprised to see so many curious things in the sea bottom. Yesterday a fisherman caught a snake, which has an eel-like tail & which body is beautifully stripped with yellow & black bands. I bought it for a few cash & will

take it up to Kiyoto for our school.

We expect to go home on the next Monday. Now allow me to inform you about our work in Kiyoto. It is growing steadily. We find more encouragement among our students, who come so directly under the Xn influence, than the people in the city. The K. people are noted for effeminacy.

Every thing they undertake to do is tinted by it. They would never work hard for any great result. They are contented in a small gain. Hence they are frightened to plunge themselves into the hard & yet noble spiritual battle field. I trust the Spirit of God will give them courage & induce them to become the cross-bearing soldiers. On the contrary to the K. people some of our students are brave & always ready to fight for their Master. They take glory in hard work. Base conversations drinking, & smoking are not practiced among them. All their doing is carried out by the Xn principles. I hope & pray daily that our humble institution will grow up to be a centre of the Xn civilization in Japan as our Dear Amherst College stands to your country.

We sent out our students to different parts of the Empire to preach right after our school closed for the summer vacation. They are more than a dozn in number. Some of them are supported by the mission fund & some are sustained by some native friends, who invited them to come to their towns.

I hope you will ever pray for us so that whatever we undertake to do may be all guided from on High & and pray also for the out pouring of the Spirit upon this nation. President Clark of Amherst Ag. College paid us a short visit last month.

I enjoyed it very much.

I suppose he must be at home at this time. I hope you will hear from him all his experiences & a great success in his Xn labor among the students who came directly under his influence.

I am much obliged to Mrs Seelye for a photograph of your daughters. It is a fine likeness. I will enclose a picture of our family group for her in return. My father mother, sister & wife unite with me in sending the kindest regards to your family.

Please remember me to those your friends, with whom I am specially acquainted.

Remember me also to Kanda.

I trust he is doing well in the College. Hoping & praying that you are all well this summer.

Your ever grateful friend

J. H. Neesima.

Please tell Miss Hattie H. Davis that I received her kind note some time ago, & thank her for her sending us the first fruit of a little mission circle; \$40, to be used for our "Kiyoto Home" ① We expect to build our girls school pretty soon. When it is completed, I will get it's photograph taken & send it to that *Mission Circle*.

Then I will write to Miss Davis. My wife unites with me in sending the hearty thanks & kindest regards to Miss Davis & the young folks of the circle.

- ① in のあやまり
- ② この重複は頁の移り目のところであつたもの。
- ③ クラーク博士 Dr. William Smith Clark (1825-1886) はアーモスト大学の1848年卒業生であり、1851年に M. A. をとり、ドイツのゲッティンゲンで1852年に Ph. D. をとつた。1852年から1858年までアーモスト大学の化学と動物学の教授、1858年から1867年まで化学の教授をつとめたが、この間、新しく設立されたマサチューセッツ農科大学の初代学長に選ばれた。彼が札幌農学校設立のために一年間日本に来ることになつたのは1876年から1877年にかけてのことであつた。クラークのこの同志社新聞は、彼があつた「少年と大志を抱け」の言葉を殘して札幌を去つて後のことであつたにちがいない。
- ④ 新島は同志社の女學校のことをいいつも Kiyoto Home と呼んだ。